

新 刊 紹 介

新
刊
紹
介

1. 古代氏族の系図を読み解く
(歴史文化ライブラリー 541) 鈴木正信著
2. 正倉院文書の一研究
——奈良時代の公文と書状—— 黒田洋子著
3. 中世東海の大名・国衆と地域社会
(戎光祥研究叢書 22) 山田邦明著
4. 武家手鑑 付旧武家手鑑
(尊経閣善本影印集成 77) 前田育徳会尊経閣文庫編
5. 高群逸枝 1894—1964——女性史の開拓者のコスモロジー——
(別冊環 26) 芹沢俊介・服藤早苗・山下悦子編
6. 都市からひととく西アジア——歴史・社会・文化——
(アジア遊学 264) 守川知子編
7. 女性たちのフランス革命
クリスティーヌ・ル・ボゼック著
藤原翔太訳

鈴木正信著

『古代氏族の系図を読み解く』

(歴史文化ライブラリー 541)

吉川弘文館 二〇二二・二刊

四六 二四〇頁 一七〇〇円

本書は、古代氏族系譜(系図)の研究で大きな成果を挙げってきた鈴木正信氏の六冊目の単著であり、『日本古代氏族系譜の基礎的研究』(東京堂出版、二〇二二年)と『日本古代の氏族と系譜伝承』(吉川弘文館、二〇一七年)に所収の『海部氏系図』・『円珍俗姓系図』・『紀伊国造次第』に関係する論考を新たな知見も含めて再構成し、一般・初学者向けに書き下ろしたものである。本書では、上記の三つの系図を読み解く中で、系譜の形成過程や、関係する氏族の成立・展開などについても考察する。

プロローグでは、系譜と系図の基礎的な事項の確認とともに、古代氏族の系図に関する研究史を概観し、本書の構成および取り上げる系図についての概略を述べる。

第一章では、『海部氏系図』を取り上げる。まず、同系図の基礎的事項を確認し、

龍神社との関係や同系図の成立過程を明らかにする。次に、同系図より読み取れる海部直氏の問題に移り、第一に龍神社の祝の構成の問題と関連させて氏の内部構造を考察し、第二に和邇臣氏や尾張連氏と同祖關係を結ぶに至った過程を論じる。

第二章では、『円珍俗姓系図』を取り上げる。まず、同系図をA・B・Cの三部分および略系図に分けてその構成について述べ、さらにA・B部分の諸問題について考察する。次に、同系図の原資料の成立や、因支首氏の改姓と連動した同系図(の原型)の成立過程を明らかにする。最後に、円珍が同系図の作成にどの程度関与したかを考察し、また、円珍個人が因支首氏とは異なる系譜意識を持っていたことを説く。

第三章では、『紀伊国造次第』を取り上げる。まず、同系図の現状本には貞観十六年の写本の内容が良好な形で保存されていることを確認し、さらに他史料との比較により同系図に独自の原資料が存在したことを考察する。次に、紀直氏の内部構造を明らかにし、九世紀における紀直氏の状況と同系図の書写との関連を論じる。最後に、

紀直氏の展開とその系譜が形成されていく過程を追う。

エピソードでは、古代氏族の系図がその時々氏族側の意図に応じて伸縮したことを強調し、また、氏族系譜には氏族を取り巻く環境や時代背景に応じて変化するという「可変性」と、その中核をなす部分が維持されるという「不変性」とが混在していたことを説く。そして、系譜や系図が、古代氏族による一種の歴史叙述(ヒストリオグラフィ)であったことを述べる。

本書では、系図の翻刻だけでなく、その写真も掲載しており、さらに系図の一部分を説明する際には拡大写真も載せているため、それぞれの系図について非常に理解しやすくなっている。系図はその性格上、文章のみで説明をされると難解になってしまいが、その点に十分な配慮がなされており、さらに図や表も多く用いて、一般の方や初学者にも分かりやすく作られている。また、系図という史料そのものを対象に研究を行い、その成立過程や性格などを明らかにしたうえで、氏族の諸相に迫る本書の手法は、史料を利用する研究者が見習うべき点であ

ろう。一般の方から研究者にまで多くの人々に、ぜひ本書を手にとっていただきたい。(前野智哉)

黒田洋子著

『正倉院文書の一研究』

——奈良時代の公文と書状——

汲古書院 二〇二二・二刊

A5 四八〇頁 一一〇〇〇円

本書は、著者のこれまでの研究の集大成ともいえるべきもので、問題意識の推移や研究の展開を追うことができる。第一部の「第一章 天平宝字年間の表裏関係から見た伝来の契機」では、「造金堂所解(天平宝字三・四年ごろに活動した造金堂所の決算報告書)の金堂が、『法華寺阿弥陀淨土院金堂』ではなく『法華寺金堂』であり、また天平宝字年間の文書は、安都雄足や下道主ではなく上馬養によつて残されたもの」と主張する。綿密な考証により定説を覆した論文である。一方「第二章 八世紀における錢貨機能論」は、「造営事業における国家

の支払手段」という錢貨の発行意義ばかりを強調する風潮に対し、一石を投じた論文である。著者は、財源を確保するために大量の綿を錢貨に交換している例、日割り計算や等級を設けた錢貨による給与の支払い例などに注目して、交換手段としての錢貨の役割を追究する。「第三章」「布施勘定帳」の基礎的分析」は、天平勝宝三年ごろに作成された五点の「布施勘定帳」を検討したもので、その内容や書式、作成の目的参照した目録を考察し、さらに布施額算定の帳簿から經典管理のための帳簿として転用されたことを述べる。当論文は布施勘定帳の基礎研究として活用されており、ここから南都六宗の成立や「華嚴經為本」の一切經法会体制に関する優れた論文が生み出されている。

第一部の「第四章 言葉綴った人々——九部足人の場合——」では九部足人が残した三通の文書から、彼が正式に公文の書式を習得してこなかったものの、文字を使いこなしたことから運搬業務などに携わることができたとする。第二部の「第一章「啓」・書状の由来と性格」と「第三章 正

倉院文書の「啓」・書状に見られる書の性格」では、正倉院文書にみえる「啓」・書状は、官人の間で顧意を伝える場合に用いられたこと、官人が日常業務のなかで書いたものには、文書や帳簿といった「公文類」と公文以外の「書状類」の二種類があり、後者は前者を補完したことを述べる。さらに「公文」は公式令の書式規定に準拠して楷書で書いたのに対し、「書状」は「書儀」に従い、草・行書体で書いていたものの、楷・行書体とは形も書き順も異なる本格的な草書体は定着していなかったとする。第二部の「第二章『国家珍宝帳』に見える「王羲之書法廿卷」の性格」では、王羲之の「書法廿卷」が、初学者向けの草書の手本であったこと、「第四章 正倉院文書の中の「王羲之習書」について」では、

王羲之の書は奈良時代には概念受容、「集字聖教序」に基づく楷・行書の受容、王羲之草書の受容、と段階的に受容されたことを述べる。さらに奈良時代は古い書法から王羲之書法への転換点であり、その担い手となったのは実務官人であったとする。

これまでも著者の論文は学界に大きな影

響を与え、当該分野の研究を牽引してきた。そして近年は正倉院文書のなかでも、もっとも読みにくい書状の研究に精力的に取り組んでいる。本書からは、難解なテーマに挑み続ける著者の真摯な姿勢が伝わってくる。多くの人々に読まれることを期待したい。(市川理恵)

山田邦明著

『中世東海の大名・国衆と地域社会』

(戒光祥研究叢書 22)

戒光祥出版

二〇二二・二刊

A5 四二〇頁

八八〇〇円

本書は、著者が愛知大学に赴任以後一五年程の間に地の利を生かして研究した、中世東三河・東海地域の大名・国衆についての論考である。三部で構成される。

- 第一部 中世の東三河とその周辺／第2部 戦国時代の東三河とその周辺／第3部 東海地域の中世・戦国
- 第一部第一章「地域から歴史を見る」で

は、地図分析と現地踏査の組み合わせによる、中世の地理の分析方法を提示。現在の豊橋地域および名古屋市中川区・港区(尾張国富田荘域)を個別事例として考察する。第二章「鎌倉・室町時代の東三河」では、平安後期から一六世紀頃までの東三河史を概観。特に荘園の発生・衰退や、守護・在京武家領主・現地武士による当該地支配の隆盛と衰退を描く。零細な史料を丹念かつ正確に分析して、豊かな東三河史を描く。第三章「中世後期の船形寺・桐岡院」は、中世後期の普門寺について述べる。一色氏、牧野氏、今川氏、松平氏と領主が変遷する当地にあつて、同寺がいかに存続しようとしてきたかが明らかにされる。第四章「西郡という地名」は、蒲郡の地名由来の一つであり中世に地名起源のある「西郡」について、踏査の知見も踏まえつつその範囲を明らかにする。三河宝飯郡の府中から山を隔てた、同郡の「西の方」との意味で「西郡」と呼ぶようになったとの注目すべき推測を提出する。第五章「三河・遠江国境地域の中世」は、三河・遠江国境地域の中世について、神宮領の展開、僧侶・職人の交

流、東海道の風景・交通のあり方の三つのテーマに注目して論じる。

第2部第一章「古文書が語る吉田城」は、交通の要衝である今橋(吉田)宿・城について論ずる。中世後期に支配者が頻繁に変わる様を描く。同城の建築構造や家臣の城下居住のあり様に言及したのは重要な成果か。第二章は「戦国時代の吉田天王社と石田家」であり、第三章「戦国時代の首沼一門」は、戦国期奥三河の領主・菅沼氏一門について論ずる。この地域は今川、松平、武田と諸大名の攻防が激しく、相敵対する側に分裂しつつ争う様を、一次史料を丹念に分析して描く。第四章「開城と降伏の作法」では、三河の田原城・吉田城・牛久保城、遠江の懸川城・堀江城のケースを取り上げ、戦国期の開城と降伏について論じる。開城・降伏のように平和裡に終戦するあり方が一般的だったかと提言する。

第3部第一章「古文書から見た東海の地域性」では、色成・引得・盜賊・悪党といった東海地域特有という言葉を取り上げ収集し、使用地域の分布状況や使用年代について論ずる。かかる文書用語の発見は誰にでもできるわけではない。しかし語義の考察に課題を残していると思われ、また社会経済史的・法制史的観点からの考察がないのは大変惜しい。第二章「遠江・三河から見た武田氏」は、戦国期武田氏の遠江・三河への軍事侵攻について、武田氏からの視点ばかりでなく、両国国衆や徳川家康の動向をも踏まえつつ論じたもの。講演記録ではあるが、学術的にも魅力的な言及がある。特に長篠合戦の通説的通俗的位置付けに対する異見は、学術上も価値が高いだろう。第三章「三河から見た今川氏」では、今川氏が三河国内に支配地のあつた約六〇年間を、三河の国衆・住人の視点から論じる。支配方法は、遠江などの国衆を城番に置いて数年毎に交替させるもので、今川当主が入国して政治や軍事を指揮する事はほとんどなかった。それが地域支配が順調でなかった原因と推測する。

本書の特長は、著者の史料読解能力・収集能力が高いこと、そして、加えて着実に現地踏査が史料解釈に正確さと深みを与えていることである。このようにして東三河や東海地域の個別的な状況が詳しく分析さ

れただけに、莊園制論や戦国期軍制論など、日本史学上の主要な研究テーマとの比較検討が少ないのは惜しいと思われる。

(村瀬貫則)

前田育徳会尊経閣文庫編

『武家手鑑 付旧武家手鑑』

(尊経閣善本影印集成 77)

八木書店出版部 二〇二・一二刊
B5 二三三頁 二九〇〇円

尊経閣文庫所蔵の優品を複製刊行する善本影印集成の第一〇輯(全一二冊)は、中世史研究者待望の古文書の部である。本冊は一冊目で、武家手鑑三帖および旧武家手鑑として伝わる史料、合わせて二五八点を収めている。続く一一冊は、尊経閣古文書集として整理された二二〇〇点以上の古文書を取りめることになる。

武家手鑑は、一九七八年に影印本が刊行され(臨川書店刊)、太田品二郎が担当した解題・釈文(太田品二郎著作集)五、吉川弘文館、一九九三年に再録)もある。そのうえ

での本冊刊行の意義のひとつは、図版がモノクロからフルカラーになった点にある。朽損・汚損の状況や料紙の質感など、カラーであれば読み取れる情報は多い。

さらに今回は対象外だった旧武家手鑑の史料を掲載したことも重要だ。前田家には、前田綱紀が編成し、同斎泰が増補再編した武家手鑑があった。一九四一年、相田二郎も関与し、少なからぬ文書の入れ替えを経て出来上がったのが現在の武家手鑑で、もとの武家手鑑から移行に漏れた史料をまとめたものを旧武家手鑑と称している。いわば落選組だが、たとえば12足利義教御内書は、伏見宮貞成から玉葉和歌集奏覧本を贈られた際の礼状だ。これが採用されなかったのは、親王に宛てたものゆえ、差出書が署名であり、花押を載せないからだろう。このように武家手鑑収録のものに勝るとも劣らない文書が多数存在している。

解説は同文庫の執筆になり、書誌および綱紀以来の武家手鑑の変遷を詳細に検討し、天保年間の武家手鑑に関する目録兩種と現在の武家手鑑ほか同文庫現存史料との対照表を掲げている。個々の文書について釈

文・解説は載せないが、書誌一覧として、形状、法量など基本的な事項のほか、端裏書や封紙、貼紙、付箋、極札ほかの附属品さらには一九四一年以前にどの文書群(編年文書、諸家・諸寺文書など)に収められていたのかについての記載がある。

手鑑に収められた古文書は、本来所属していた文書群から切り離された断片であり、史料としての利用にあたっては関連文書の搜索が必須である。ここに収める文書の多くは、尊経閣古文書集に関連文書が存在しており、同一の叢書で刊行される意義は大きく、研究の進展につながるはずだ。

同時に、他所の手鑑に収める文書との出所の共通性も検討すべき課題であることを指摘しておきたい。たとえば、武家手鑑上帖2平清盛、3宗盛、4頼盛、7経正および8源義朝の書状または請文は、いずれも同一の体裁で、袋綴冊子装聖教の紙背文書である。これと相似する体裁の院政期の聖教紙背文書は、隠心帖や林家旧蔵手鑑など古文書を多く含む手鑑の優品に収められる。また、中帖37大内義隆書状は数少ない自筆のひとつと認められるが、隠心帖にも同じ

筆跡の書状が見出される。このような複数の手鑑に存在する特徴的な文書は、関連文書の搜索というにとどまらず、江戸前中期における古文書の流通状況、いいかえれば文書群解体の状況を知る手がかりになる。

図書館・研究室にはぜひとも備えて欲しいシリーズである。最後に文書名等について気づいた点若干を記す。武家手鑑中帖30

足利義晴御内書は、すでに指摘があるところ久我晴通書状である(金子拓「久我晴通の生涯と室町幕府」『織田信長権力論』吉川弘文館、二〇一五年、初出二〇一四年)。このほか、武家手鑑上帖29「大仏貞直」↓「大仏判官某」、同中帖25「年未詳」↓「永正元年」、旧武家手鑑10「伝足利義持書付」↓「伝足利義持御内書(断簡)」、13「伝足利義政書付」↓「伝足利義政御内書(断簡)」、64「東常縁跋文」↓「東常縁筆拾遺和歌集断簡」(一二七六―一二七九、書写奥書)、同66「侍所頭人」↓「政所頭人」、104「杉原元行」↓「飯尾元行」、105「歌合書」↓「定家卿百番自歌合断簡」(一二三―一七)、108「松田盛香」↓「松田盛秀」となる。

(末柄豊)

芹沢俊介・服藤早苗・山下悦子編

『高群逸枝 1894―1964―女性史』

の開拓者のコスモロジー――』

(別冊環 26)

藤原書店 二〇二二・二刊

菊菱 三八四頁 三三〇〇円

世代・専門・社会的立場の異なる寄稿者が様々な切り口から考察した本書。奥深い読みやすさ、引き込まれる内容が鑑められている。本人にスポットライトを当てつつも縁ある人々から高群を描き出す試みや、彼女の詩・手紙・巡礼記の引用、解説付作品や関連年表の提供等、多岐で役立つ内容にわたる。プリズム的手法で高群の複雑な人間関係・変わりゆく視点・研究・生き方を鮮やかに描き出す素晴らしい一冊である。

では、今なぜ高群逸枝なのだろう。スベイン風邪・関東大震災・恐慌・大戦を体験し、史学・文学・社会思想等の分野で活躍した高群。百年後の今、パンデミック・地震・不況・戦争の可能性に憂える中、私達が彼女の人生や作品から学べる点は何か。

一〇〇(五八)

また、女性史発展に貢献したにも関わらず、高群史学の検討は十分になされず、彼女に対する改竄・捏造疑惑をはじめ、その評価は妥当だったのか。これらの残された課題に取り組むためにも、この本は編集されたといえる。

高群を語る上で無視できないのは、彼女の夫、橋本憲三の存在であろう。「I 高群逸枝の生涯」によると、高群は橋本から執拗な精神・身体的虐待を受け、逃げて「曲従」して彼の元に戻る共依存関係に陥っていたという。それは高群死後も、彼女の作品に対する冒瀆として続いたという。自己中心的で「ひねこびたなれの果て」とされた橋本だが、石牟礼道子には崇拜され、「はためにも匂うように若々しく典雅」で誠実な方という橋本像が提示される(IV 高群逸枝 新しい視点から「二〇三頁」)。そのギャップには驚かされるが、正反對視点を併せて提供し、取えて意見統一を強制しない姿勢がこの本をより興味深くしている。本書の重要な論点に高群の女性史研究がある。「III 高群女性史の成果と課題」では、「母系制の研究」「日本婚姻史」「招

婚姻の研究」等の代表作を基に、古代・現代の長いスパンで、各時代を専門とする研究者が高群論を考察していく。その過程で問題も指摘されるが、日本史研究にジェンダー的視点を取り入れた先駆者高群が提起した課題や論点は高く評価され、今後も批判的に継承・検証すべきだとされる。例えば高群による母系制の具体例は、古代日本は双系制社会とする現在主流の見方に繋がりを、今後も日本史研究に寄与するものとする。また、栗原弘の「高群捏造説」は、栗原氏が高群説を「意図的に否定」したもので不成立とした点は重要で、これは世界に周知されるべきだろう。更に、高群による女性史研究が長く軽視された理由も分析される。例えば、戦時中の思想弾圧による説者制限や、戦後の史料評価の変化と皇国史観批判による高群研究評価の低下等が示された。高群研究が今後真剣に受け止められ、再検討される契機に繋がる意義ある点である。

豊富な内容全てへの言及は控え、印象に残る問い——高群はなぜ戦時中に日本軍国主義を支持したのか——に触れて結びとしたい。

新刊紹介

アンドレア・ゲルマー氏は、フェミニスト的視点から歴史を捉えた先駆者として高群を讃える一方、そのフェミニズムに根付く日本主義・民族中心主義・本質主義的視点を指摘し、これが彼女の思想と真逆ともいえる天皇中心の家父長的軍事体制支持を導いたとする。西川祐子氏も同様に、戦争は勃発瞬間から始まるのではなく、平時から軍備と共に個々の意識・国民統合思想が構築・展開され、潜在的に準備が進む恐れを指摘する。現在社会でも、日本主義的動向が脈々と息づいている可能性は無視できない。それを認識し、今後どう対処するかは、日本の真の国際化と平和維持に重要で、高群の人生と作品が示唆する点が多い。

高群が生きた時代・死後五十年後・死後百年後の「高群逸枝受容史」を分析し、いかに世代を超える先人の歴史——廃墟の記憶・犠牲・選択・希望——から学べるか、また、危機的諸問題に直面する人類の今後の道標を得られるかに取り組んだ本書。一読されることを、ぜひお勧めしたい。

(河合佐知子)

守川知子編

『都市からひもとく西アジア』

——歴史・社会・文化——

(アジア遊学 264)

勉誠出版 二〇二一・一二刊

A5 二七二頁 二八〇〇円

本書は新学術領域研究「都市文明の本質——古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究」の一環として編まれた、一五名の歴史研究者による西アジアの都市をめぐる論集である。都市を切り口に、西アジアの多様な社会や人々の歴史を描き出そうとする点に本書の特徴がある。全体の構成は、まえがきと四部に分けて収録された論文——二編およびコラム三編から成る。以下、本書の内容を簡単に紹介する。

第一部「都市をつくる」は、都市の形成と発展に焦点が当てられる。亀谷学「ムスリムがはじめて建設した都市バスラ」は軍営都市バスラの経済・学術都市への変容を、柳谷あゆみ「二つの春の母」モスルの一二・一三世紀」はモスル旧市街の基礎を築いたザンギー朝政権による建設事業を論じ

る。塩野崎信也「スルタンとシャーの新たなギャンジャ」はオスマン朝とサファヴィー朝の「共同作業」による同都市の区域移転を明らかにした。大矢純「港市マスカトとポルトガル人」は絵図をもとに植民都市マスカトの形成過程を論じる。

第二部「都市に生きる」では、都市の多様な人々の動態が描き出される。谷口淳一「アレツボが「シーア派の街」であった頃」は一〇—一三世紀アレツボにおけるス

ンナ派とシーア派の共存の模索を追う。杉山雅樹「ティムール朝期のヘラートにおける聖者たち」は都市社会で大きな存在感を放った聖者の姿をその役割とともに論じ、中町信孝「境界上の都市アインタープ」は文化的境界に位置する同都市を出自とする学者の、その境界性を活かした活動を描く。栗山保之「船乗りたちが集う町アデン」は船乗りたちの視点から港市とそこに集う人々の様子を活写する。

第三部「都市を活かす」では各都市の機能的特徴に光が当てられる。櫻井康人「フランク人支配下の都市エルサレム」は十字軍時代のエルサレムが観光都市として整備

される過程を論じ、山口昭彦「山城から平城へ」はクルディスタンの一クルド系領主の拠点の移転に、近世の同地域社会における都市機能の変化を見出す。木村暁「スンナ派の牙城ブハラ」はマンギト朝によるスンナ派の都としてのブハラ復興とその意図を論じる。田中雅人「民族の交差点」ハイファ」は一九世紀末東地中海地域を代表する同国際港湾都市の発展過程を追う。

第四部「大都市を彩る」では、まず守川知子「イスファハーンは世界の半分？」がサファヴィー朝新都の商業空間における商業の発展を描く。深見奈緒子「ナボレオン地図から読み解くカイロ」は地図の精緻な分析により一八世紀末カイロの空間構造を明らかにし、川本智史「ノスタルジックな近代」は一九世紀イスタンブールの都市改造の試みとその結果を検討する。

本書で扱われる都市は地理的にも時代的にもバラエティに富み、各論者はそれぞれの切り口から、都市やそこに生きる人々の姿を活写し、西アジアの都市の持つ多様な側面を浮かび上がらせる。また全体を通し

てみれば、各論考が繋がり合い、七世紀から二〇世紀初頭に至る西アジア史の大きな流れが描き出される。都市を通してみる歴史の魅力と可能性に気付かされる本書は、西アジア史研究者はもちろん、広く都市に関心を持つ人にお薦めしたい一冊である。(三谷美晴)

クリスティーン・ボゼック著

藤原翔太訳

『女性たちのフランス革命』

慶應義塾大学出版会 二〇一三・一刊
四六 二二四頁 二四〇〇円

本書は、フランス革命史家クリスティーン・ル・ボゼックが革命期の女性史を概観した著作 *Christine Le Bozec, Les femmes et la Révolution 1770-1830*, Paris, Passés Composites/Humensis, 2019 の全訳である。革命期の女性史については、D・ゴディノの『編み物女の市民』(一九八八年、再版二〇〇四年)を筆頭に、近年もC・プリュモジュー(二〇一六年)やC・ファイヨル(二

〇一七年）ら若い世代の博士論文が相次いで刊行されている。本書はこうした研究成果を参照した最新の書籍であり、また一般の読者にも開かれた比較的平易な書籍となっている。

本書の目的は、サロンの女主人に象徴されるような旧体制末期の自由な女性たちが、フランス革命期に政治的権利を剥奪されて公共空間から除外されていき、ナポレオン法典における従属的地位へ追いやられた、という通俗的イメージを修正することにある。具体的には第一に、革命前夜には、ジョフラン夫人やデファン夫人など、教養あるサロンの女主人が啓蒙社会の知的・文化的紐帯として華やかに活躍したとして知られるが、当時の女性は夫や兄弟など男性に従属する立場にあり、男性の同意がなければ法廷に立つことや商取引の契約をすることさえ許されなかった。たしかに、画家エリザベト・ルイーズ・ヴィジェール・ブランやデザイナー兼経営者であったローズ・ペルタンなど、幾つかの職業で成功例があるが、男性のみならず女性からも自立した女性や教養ある女性に対する軽蔑の眼

差しがあり、女性の社会進出には無数の障壁が存在したことを軽視してはならない。第二に、フランス革命が全体を通して女性の権利後退を招いたわけではなく、むしろ一七八九年から一七九五年六月にかけて女性の権利の進展が見られた点を著者は強調する。革命が勃発すると、ヴェルサイユ行進や女性クラブの創設に象徴されるように、多くの女性が革命の動乱に身を投じた。彼女たちの関心はもっぱら食糧問題にあり投票権の獲得には至らなかったが、夫婦間の平等の宣言や双方の同意に基づく離婚容認など社会的地位で一定の成果を挙げ、裁判所に出廷したり、契約書に署名したりできるようにになった。女性運動は一七九三年の春から夏に至る恐怖政治期に絶頂に達したが、女性の持つ「有害な」本性が糾弾されるようになり、一七九五年、芽月と牧月の蜂起鎮圧によって女性たちの政治運動への参加が途絶え、霧月三日法で公共空間における女性排除が定められた。こうして一八〇四年、ナポレオン法典における女性の隷属状態に至ったのである。

本書は、二百頁程度の短い書籍ながら、

さまざまな対象にバランスよく目を配った良書である。革命期の女性といえば、オランブ・ド・グージュや罗兰夫人のようなバリの著名な女性が注目を集めがちだが、著者は市井を生きる女性、地方の女性、反革命家の女性、反フェミニズムの女性にも目配りしており、これが本書の大きな特徴となっている。訳注の助けもあり、最良の入門書となるだろう。

（楠田悠貴）